

■ 配布資料：2015年2月9日のミーティングでは、下記リンク先の文章の内容をかいつまんで紹介しました。正確な内容は元の記事を参照してください。配布したバージョンに追加・変更を加えた箇所は紫色の部分です。

ホモノーマティビティ入門：ホモノーマティビティって何？ 私たちの運動をどうだめにするのか？

Homonormativity 101: What It Is and How It's Hurting Our Movement

January 24, 2015 by Laura Kacere

<http://everydayfeminism.com/2015/01/homonormativity-101/>

「ホモノーマティビティは、私たちが今日のクィア・コミュニティの中で、特権という問題を扱う際に使われる言葉であり、白人特権や資本主義、性差別、トランスミソジニー、シスセクシズムが交差する中で起こり、より広い性的自由や性的平等を目指す運動から多くの人々を置きざりにしてしまう、特権の問題についての言葉である。」

ホモノーマティビティは、日常生活のなかでどんな風に具現化されているのか？

《言葉の説明を先に付け加えておきます》

ノーマティブ (normative)

“normative” は英語で、「規範的な」「(特に規則を定めて) 基準を確立しようとする」という意味の一般的な形容詞です。名詞化されて「ノーマティビティ (normativity)」になります。ここから「～ノーマティビティ」という言葉は派生していて、何らかの価値判断が入っているのに、自然で当たり前で客観的なもののように浸透していることを、あえて指摘するときに使われます。

ヘテロノーマティビティ (heteronormativity)

「私たちの文化の中の、政策や制度のレベルから個々人間の関係にいたるまでいきわたっている、『ノーマル』なセクシュアリティを判断する価値観／評価のこと」で、「異性愛が世の中にある唯一の『ノーマル』で『自然な』指向であり、その規範に沿っている人たちに特権があり、その規範の外にいる人たちをアブノーマルで間違っていると位置付けるもの」

白人特権 (White privilege) <http://everydayfeminism.com/2014/09/white-privilege-exists-america/>

ここで引用されているペギー・マッキントッシュの説明※「ある集団が特権を持っているとは、その人が何をしたか、あるいは何をするのに失敗したか、という理由ではなく、その人が属している集団が何であるかによって、他の人たちは何か価値のあるものを否定されているときに、その集団はその何か価値のあるものを持っていること」

「特権へのアクセスがあることは、その結果どうなるかを決定するものではない。けれども、特権へのアクセスがあるということは、特権を持っている人が、どんな才能にしろ、能力にしろ、やる気にしろ、持っていたとして、そうした才能や能力ややる気といったものからその人にとって何かしら良い結果が導かれやすくなるような、強みには違いない。」

- 白人としての特権を持っていることとして挙げられている例 [構造的に次のことが起こりやすい状況がある]：

「逮捕されづらい」「大学に入りやすい」「職場に『なじむ』と判断されやすく仕事に声をかけてもらいやすい」

「『凶悪犯』と思われづらい」「『怒っている』というラベルを付けられづらい」

「行方不明になったときにマスコミで大きく取り上げられやすい」「適当な住居を見つけやすい」

- 参考：ペギー・マッキントッシュによる白人特権の例は、日本語でこのページにも紹介されているのを見つけました。

http://www.ne.jp/asahi/kagaku/pico/rachel/rachel_02/rehw_745.html

性差別 (sexism) <http://everydayfeminism.com/2013/03/gay-mens-sexism-and-womens-bodies/>

米国のファッションや女性の身体とのゲイ男性の関係について一般的に考えられていることとして…米国のゲイ男性は女性のファッションや女性の身体についての専門家として歓迎される傾向がある。よく言われるのは、ゲイ男性は女性と性的に親密になりたいという意識的な欲望をまったく持っていないので、彼らが求められてもいない時に触れたり体をまさぐったり（物理的な暴力を行使）したとしても何の罪もない、というのである。そんな

わけで、多くのゲイ男性は興味深いことに女性のからだについて気まぐれに批評を加えたり触れたりすることに何の躊躇もしなかったりする。(以上、上のページに書かれていることの一部を紹介)

トランスミスジニー (transmisogyny) <http://everydayfeminism.com/2014/01/transmisogyny/>

「ジェンダー・スペクトラムの中で、オンナ側にいる、トランス女性やトランスやジェンダー・ノンコンフォーミング人たちに向けられる文化的な嫌悪、個人的なまた国家／公権力による暴力、それから差別のこと。」

シスセクシズム (cissexism) <http://everydayfeminism.com/2014/03/everyday-cissexism/>

「私たちは性器に基づく性が前提の社会に生きている」

「シスジェンダーの人たち、出生時にカテゴライズされたジェンダーに自己同定している人たちは、トランスの人たちと比べてかなり広い範囲で特権を享受している。」

「シスセクシズムは、トランスフォビアの中でもより捉え難い形式と考えられることも多い。」

「(フェミニズムの中でも) 性と生殖に関する権利運動は、特にシスセクシストな前提がなされやすい場である。」

《本文に戻ります》

「私たちの文化はヘテロノーマティブ(異性愛規範)がしみわたっている。けれどもクィアな経験や権利が受け入れられるにつれ、LGBQ な場の中のセックスやジェンダーの表現の規制も強くなってきている。これがホモノーマティビティである。」

「ホモノーマティビティとは、クィアな人たちが、支配的で、主流で、異性愛の文化の一部になりたいという前提のことを指したり、私たちの社会が、そうする人たちを最も可視化され権利を認められるに値するとみなして、恩恵をさずけるやり方も指している。」

《誰が可視化されているのか?》

- メディアに取り上げられやすいのは、シスジェンダーの、ジェンダー規範的な、白人の、中産階級の、ゲイと自己同定している人物

- メディアに取り上げられるクィアな関係も限定的で、ヘテロノーマティブで性別二元論的なジェンダー表現の真似になる傾向

- 有色人種の人を取り上げられる場合でも、型どおりになりがちだったりする。

- 「メディアでの LGBQ な人たちのステレオタイプや典型的な見せ方というのは、クィアな人たちの複雑なリアリティを単純化したり、矮小化するだけではない。そうしたメディアのあり方は、LGBT の『あるべき』姿について規範的な基準を設定することに関与してしまう。」

《“登録商標チックにいう「ゲイの権利獲得運動」の[唯一無二の]主要な目標としての結婚を平等にできる権利》

「結婚という問題は、すべての関係性が、セクシュアリティと家族構成について異性愛規範的な基準をまねなければならないという要件を設定する。

それは、すべての人がストレートの一対一のカップルに張り合いたいと思っているという考え方を推進する。」

「もし結婚制度が、ある種のクィアな関係を包含するものになったとしても、他の種類の関係性について規制することは永続化されるし、何が『許容されるクィアな関係』かを決める境界線は維持されることになる。」

「結婚の問題に焦点を当てることは、ほとんど何にも問わないに等しい。現実の関係性についての変革や社会の変革よりも、ある種の関係性についての法的な是認を優先するだけである。」

「異性愛規範の外にいる人たちを、『伝統的なストレートのアメリカ』が求めるのと同じものをほしがる人として表わすことで、結婚の平等を求める運動は、異性愛の優位性や規範に対して挑戦するのではなく、そうしたものをむしろ再生産することで、また誰が権利を持つに値するのかという根拠として異性愛の優位性や規範を使うことで、こうした社会制度へのアクセスを求めるためにたたかう。」

《The Human Rights Campaign (And Other Major Non-Profits)》

(略) 元の記事ではいわゆる米国で主流の LGBT 運動団体に対する批判が書かれています。

《The Silence Around Chelsea Manning》

(略) チェルシー・マニングについてそもそも聞いたことがない人は、これを読んでから他の記事などを読むと分かりやすいかもしれません。

2013/9/1 付 (翻訳記事) “速報 968 号 ブラッドリー (チェルシー) ・マニング：自由な社会で生きるためには：戦争の実態を明かす機密情報を公開して 35 年の刑を受けた米軍兵士の声明” <http://www.tup-bulletin.org/?p=1544>

《イスラエルでのホモナショナリズム》※[]は翻訳時に追記した。また適宜『』「」の表記を改めた。

「ホモナショナリズムという用語は、ホモノーマティビティの概念を一步進め、クィアな人たちそのほとんどが白人で、西洋のゲイ男性—が彼らの国々のナショナリストなイデオロギーに政治的に連携していることを指している。

ホモノーマティビティがクィアな人や場や運動が異性愛の文化規範と緊密に連携すること指している一方、ホモナショナリズムは、愛国主義や国家主義、政府軍やその他の国家権力による暴力を支持する側につくことを指している。

現時点では、クィア的な進歩[非規範的な性行為が非犯罪化されたり、同性カップルが異性カップルと同等の法的な権利を獲得することなど]は、一部の国では良いものであり近代的であり、戦争や植民地化や占領の道徳的な正当化のためのシンボルとして利用されている。

これと同様に西洋諸国は、類似のやり方で女性の権利を利用してきた。

クィアがより許容される中で、こうした進歩は、イスラム (教/人) に対する嫌悪また反移民的な態度の意図的な永続化を通して、ある種の国々が他ののれかに対して暴力を行使する権利を推進するものとして使われ始めている。

たとえば、イスラエルでホモナショナリズムはより分かりやすく大っぴらに、また意識的に遂行されている。

また『ピンクウォッシング』と呼ばれるように、パレスチナの人たちに対する人権侵害から注意をそらす方法として、イスラエルが『ゲイの理想郷』だという幻想を継続的に宣伝する形でのホモナショナリズムもみられる。

ここでは、イスラエルの入植地拡大や分離壁の建設維持や国際法違反の殺人を、イスラエルによるパレスチナ占領を、当たり前のもとし支持するための、国際的な広報のツールとして、大文字のクィアの権利が、イスラエル政府によって、接收され、使われているのである。

特に著しい例として、『ブランド・イスラエル』のキャンペーンでは同国にゲイの観光客を招こうとしている。

イスラエル外務省によれば、8,800 万ドルが、主にソーシャルメディアを通じ、国際的なマーケティングのために、ゲイが休暇を過ごすのに最適な行き先としてテルアビブを売り込むべく費やされた。

さらに何百万ドルもの金額が、国外のリベラル層や若年層へのアピールのために費やされ、イスラエルは、人権擁護にコミットしている証拠として、文化的にクィア・フレンドリーであると自身を宣伝してきた。

『Queers Against Israeli Apartheid』という団体は、アラブのクィアの生活をはるかに苦境に追いやっている占領という暴力を行使している一方で、イスラエルが『ゲイの理想郷』ということこそが偽善であると批判している。

彼女ら/彼らは次のように言う。『ホモフォビアはイスラエルにもパレスチナにもあり、すべての国境を超えて存在する。けれどもクィアのパレスチナ人たちが直面している困難は、占領下で生きるということであり、彼らがイスラエル国家の暴力と支配の対象であるということである。イスラエルのアパルトヘイト制度は、人種/民族によって、ゲイの権利を一部にのみ適用するものである。』

国際的なクィア・コミュニティ内でイスラエルの説明責任について話させないようにすることは、イスラエルによる占領の問題を語らないというだけでなく、アラブやモスリムのクィアたちの声を沈黙させることである。

アメリカ合衆国は、毎年 30 億ドルを国外の軍事的援助の一環としてイスラエルに拠出し、政治的にも財政的にもイスラエルを支持しているため、私たちはクィアの間でも、主流なメディアでも、この問題について情報を得ることはほとんどない。

この問題については黙らせようとする動きにも関わらず、世界中にいる一部の素晴らしいクィア・アクティビストたちが、イスラエルやパレスチナの中にいる人たちを含めて、クィアの権利とパレスチナの占領を終わらせることとの関係について、注目を集めるべく活動している。」

■元記事ではこの後にウェブサイトや本などが紹介されています。